E.ボウエンにおける *illusion* について

川崎医療短期大学　教養部
名　木　田　恵　理　子

（昭和58年9月12日受理）

On Bowen's theme of *illusion*

Eriko NAGITA
Department of General Education Kawasaki College of Allied Health Professions
Kurashiki 701-01, Japan

(Received on Sept. 12, 1983)

Key words： イルージョンの崩壊，感情の枯渇，自己崩壊，過去の力

概　　要

エリザベス・ボウエン(1899−1973)は，*The House in Paris*(1935)，*The Death of the Heart*(1938)，*The Heat of the Day*(1949)，の中で，illusion が人間の感情生活，identity の確立において不可欠なものとしながらも，それが崩壊し，感情が死滅する世界を，徹底的，かつ，運命的に描出している。しかし，彼女は，その中で，illusion の本質を明らかにしていくとともに，illusion 崩壊の試練を乗り越えて「生き残る」ための方法についても示唆している。それは，精神の「過去」の力との提携であり，art としての illusion 確立である。ボウエンは，大戦間の「切離された」人間のもろさに結着をつけ，一層，traditionalism に傾倒していくのである。

I

illusion とは，人間が心の中に結ぶ想念の世界であり，そこに浮かぶイメージは，不安定，虚像，夢想といったはかないものである。そして，人は，普通，その illusion が自分の精神生活に大きな意味を持っていることに気づいていない。例えば，愛。愛は，互いに愛しているという幻想において成り立っている点で，illusion だといえる。愛に実体はないが，人はその中にある時，それがあまりにも本能的に自分と結びついているため，illusion だということを忘れている。人は，愛の対象に裏切られたり，死なれたりして始めて，それが illusion

だったことを自覚するのである。そして，illusion の喪失によって，人は，その中に築いていた自分という存在を失い，自己の identity は危機に瀕する。つまり，愛とか期待とかいうものは一つの想念の世界となり，その世界は人を外界の脅威から守り，支えていく防御膜の役目を果たすと同時に，一度それが崩壊すると人の心を破滅に導く恐れのあるものなのである。

愛に裏切られた人は愛する感情を停止させ，期待を裏切られた人は期待することを拒むようになる。裏切りの思い出を忘れ，二度と傷つくまいとする防衛本能が感覚の停止をおこさせるのである。しかしながら，感情を殺すことで自分を守ろうとする人は，その部分において欠けた人間となり，自分を再生することができないゆえに，脅やかされやすくなる。例えば，子供による攻撃。子供の美質は無垢の心にあるが，無垢ということは無知であり，相手のことがわからないことから無意識のうちに残酷な行為に及ぶことがある。感情豊かな子供は，傷をかくして生きている大人に，愛とか期待とかを求め，失った illusion を思い出させて苦しめる。

ボウエンが *The House in Paris*（以下，*HP*）と *The Death of the Heart*（以下，*DH*）において，子供と大人の出会いの中で描いたのは，そういう，illusion を失った心の，もろく，ひびわれていく様相であった。[1] そこでの大人達は illusion 喪失を経験して，感情の面で立ち直れない不能者として登場する。ボウエンは，この，人間の illusion 喪失の運命を，最終的にどう考えていたのだろうか。ここでは，前出の二作とあわせて三部作の最後とみなされている，*The Heat of the Day*（以下，*HD*）にそれを探り，更に，「生き残る」方法としてボウエンが illusion をどういう方向につないでいるのか見ていくことにする。

II

ボウエンは，*HP* のカレンにおいて illusion 崩壊のありさまを，*DH* のアンナにおいてそれがもたらしたひびわれの様相を表し，更に，*HD* においてステラの中に彼ら大人達の未来を問っている。

カレンのマックスへの愛は，イギリスで最も変動の少ない，変動を破滅とする，富裕で調和のとれた社会の anti-romanticism からの逃亡の試みであった。しかし，カレンは自分の社会に，ものたらなさと同時に愛着を持っており，強い力でそれをつなぎとめられていた。そこで，感情の点で跳ばずにはいられなかったものの，その跳躍は力のないものとなった。「外へむかう潮流がそれほど強くなかったのか」，[2] 彼女は母親のいる岸へ押し戻され，愛という illusion は崩れ去る。

それに対して，ステラの場合は，この，失われた illusion の成就に再度挑戦し，自らの意志で力強く立ち上がっている。ステラは夫の裏切りにより早くに結婚に失敗してから二十年間というものを，自分の生まれ育った社会を捨て，国内外を転々として過ごしてきた（この点，臆病に元の社会へ引きこもってしまうカレンやアンナと異なっている）。そして，今は戦時下のロンドンで，一人自由なアパート暮らしをしているのである。

空襲下のロンドンでは，誰でもいつ死ぬかわからなくて，人々の間に「まだ時が残っている

うちに，お互いが無関心でいることをやめようとする本能的な動き」がおこり，「人と人の間の壁が薄くなって」[3]いった。外界での破壊は，人にかえって生を意識させる。ステラがロバートと出会い，彼の中に愛の世界を創ったのは，このような，死者でさえ生き返らせるような，周囲の感情の充電の中で，心の，人を愛する感情が復活したためであったといえる。

彼らは，出会ってから二年間，経験を共有し，共同の記憶を形作っていると確信できるほどの，illusion に捕らえられて暮らす。

> Then their doubled awareness, their interlocking feeling acted on, intensified what was round them – nothing they saw, knew or told one another remained trifling: everything came to be woven into the continuous narrative of love; which, just as much, kept gaining substance, shadow, consistency from the imperfectly known and the not said.[4]

このように，彼らの愛の世界は，内的な力にみちており，ステラの「跳躍」は，カレンやアンナの場合に比べ，はるかに強いものとして描かれ，いったんは実像を結びえている。

しかし，完全なる一体感を共有していると思っていたロバートの中に，自分の知らない部分があることをステラは知ることになる。――彼女はロバートの母の住む家に行き，彼の中の「不在」に気づき，二人の間の共感を断つ部分があることを知る。更に，ハリソンという謎の男によってロバートがナチのスパイだということを信じざるを得なくなってくる。ステラは 'At any time it may be your hour or mine —— you or I may be learning some terrible human lesson which is to undo everything we had thought we had. It's that, not death, that we ought to live prepared for.'[5]と言い，愛が恐ろしい試練の時を迎えているのを自覚する。

ステラは，その試練に対して，カレンやアンナ以上に自分の全存在をかけて乗りきろうとする。しかし，それでも愛という illusion の崩壊は防ぎようがなかった。ロバートの裏切り行為が明白になった夜，ステラは，彼との愛の世界が壊れたのを知る。

> That small picture, with its concourse of others, made her unknot her hands above her head and begin to weep, the more desperately because of the desperate wastefulness of tears now in face of the end of all. Now it was a question of counting the last of the minutes as they ran out into hours, the last of the hours as they ran out into tomorrow, which was already today, as they never had. All love stood still in one single piercing illusion of its peace, now peace was no more.[6]

その夜，ロバートは疑惑のうちに死亡し，ステラは，二年たった後も，自分の過去に答えを見い出せず，失った部分の回復もできず，爆撃下のロンドンに一人残っている。破壊の進む都会での，ステラの空ろな姿は，彼女における，illusion，更に，感情の死滅，内的世界の終焉

を暗示している。

ステラの愛という illusion は，カレンやアンナのそれに比べ，跳躍力のある，確かなものとして展開されているが，結局，崩壊し，心の死滅を招いている。すなわち，ボウエンは，illusion を自分というものを確立させる上で重要なものとしながらも，それに崩壊の運命を与えるという，残酷な結論を出しているのである。では，他に illusion を保ち得る方法はないのだろうか。また，それを失っても立ち直る方法がないのだろうか。

Ⅲ

それを見るために，まず，ヒロイン達の illusion 崩壊の原因を探ることにする。彼女らの失敗は，一つには，跳躍に「着地点」がないことに起因している。

マックスは，自分達の愛を「暗闇での跳躍」だと言い，自分達には「着地する所」がないと言う。[7] カレンも「沖なんてものはなかった」と知る。二人には，共通の過去，歴史，家族，社会がなく，降りる場所を持たない。この，illusion を持つ所に基盤がないということは，ステラにおいて一層はっきりしている。彼女は，「自分の物は何もない」アパートに，「習慣」も持たず，過去も社会も捨てて暮らす「根無草」であり，ロバートとの愛が始まる決定的瞬間は，爆撃音によって何が言われようとしたのかわからないままになってしまった。二人は，不安定な「ボート」の上で一つの illusion を持ったのである。基盤のない，暗闇での跳躍では，illusion も脅やかされ易い。

このことは，三作品における，「家」と disillusionment との関係にも表されている。すなわち，illusion が壊れていく場所は，一様に，孤立した，生活基盤のない家になっている。——若い娘が来ては去るフィッシャー夫人の下宿屋，主が死んでしまった，番地さえわからぬ空家，切り離された土地の宿（以上，*HP*），過去のない，虚ろな家ウィンザー・テラス，シイル・オン・シイの廃屋，エディの触感のない部屋，見かけばかりで安普請のカラチ・ホテル（以上，*DH*），自分の物や習慣は一切ないステラのアパート，昔から売りに出されたままになっているホーム・ディーン（以上，*HD*）。

そして，基盤がないということは，人ばかりではなく，その時代にも言えることであった。彼らの時代は，*DH* では，こう言い表されている。

> 'For you and me there ought to be a new world. Why should we be at the start of our two lives when everything round us is losing its virture? How can we grow up when there's nothing left to inherit, when what we must feed on is so stale and corrupt?' [8]

実際に，これら三作品の舞台となったのは，第一次大戦から第二次大戦にかけての「不毛の時代」——大戦によって前時代と切り離された，「受け継いでいくべき物が残されていない」，

価値喪失の暗闇の時代である。この「暗闇」の原因について，ボウエンは，

> 'the fatal connection between the past and future having been borken before her time. It had been Stella, her generation, who had broken the link'.[9]

だと言い，ステラ達は 'the creatures of history'[10] として，時代とともに破滅への道を進んでいるとしている。つまり，人と時代に欠けていて，彼らを失敗させるものは，「過去との提携」という基盤のないことだというのである。

DH の中では，唯一人傷つけられない人間である，家政婦のマチェットが，アンナ達の生き方を評して，「奥様方には過去がおありにならない。過去のない人は自分で何をしているのかわからないのです」[11]と，過去の意味を提示している。人も時代も，過去との繋がりを失って，安定した価値観を持っていないことが彼らの行動，ひいては彼らが創る愛の世界を失敗へ導くのである。

Ⅳ

では，彼らはなぜ立ち直れないのか。— 感情とか，illusion とかは，人間の心において本能的なものであり，普通は自覚することさえないものである。それがいかに大きな力を持っているのか，人はそれを失うまで気づかないものである。

> One's sentiments – call them that – one's fidelities are so instinctive that one hardly knows they exist: only when they are betrayed or, worse still, when one betrays them does one realize their power. That betrayal is the end of an inner life, without which the everyday becomes threatening or meaningless.[12]

例えば，愛が裏切られる時，その illusion の世界は崩壊し，感情は裏切られたと知る。その時，人はどうやって自分を守るか，——一つには，再び illusion を創るべく，感情を補う別の場所を求めていく。もう一つには，愛の思い出を抹殺し，その部分の感情を停止させる。カレンやアンナの場合は後者であり，それゆえ，既にみてきたように，彼女らは脅やかされやすいのである。つまり，感情の停止が心の死となり，内面世界も存在しえなくなり，自己は分断され，もろいものとなってしまうからである。彼女達のひびわれの様相は，反対に，生き残るためには，感情を失わずに，新たな illusion を創ることだと教えてくれる。

> Illusions are art, for the feeling person, and it is by art that we live, if we do. It is the emotion to which we remain faithful, after all: we are taught to recover it in some other place.[13]

この illusion を回復させようとすれば，感情の働き，特に imagination の力を失わないようにしなければならない。なぜなら，imagination は illusion 創造の原動力であるから。そして，そのための最も簡単な方法は，子供の心で居続けることである。子供の imagination は無限ともいうべきものである。しかし，現実には，無垢の心の維持は不可能であり，大人は illusion 回復のために，「安定した物」との提携を必要とすることになる。

V

まず，「安定した物」は，人の心を illusion 喪失の混乱から救い出す。ボウエンは，「心の内がかき乱された後は，imperturbable *things* に身を落ちつけることが大切である。何もおこらなかったんだという，物のもつ落ちついた雰囲気は，私達の心を回復させる」[14]。と述べ，立ち直るための第一歩としている。更に，孤独な人の solicitude for *things* に触れ，「見知らぬ場所では，人は無意識のうちに何か慣れ親しめる物をさがす。それは，私達の感覚が home を必要とするからである。感覚が落ちつくとさまよえる人も一日のうちに根づくのである」[15] と語っている。つまり，*things* は，人を落ちつかせ，なつかしさとか連帯感とかを抱かせることで，人の感情を回復させ，更に，imagination を湧かせる泉の役目も果たすのである。

「物」の効力はそれだけにとどまらない。人が「安定した物」の中に illusion を結ぶ時，「不安定な人間」を対象とするよりも，裏切られる可能性は少なくなる。この点において，illusion は art だと言えよう。つまり，art は，人の imagination が創り出す illusion が絵，詩，散文などの形をとったものであり，人に様々な連想を抱かせ，感情を高まらせ，現実の脅威からその心を守るという点で illusion の至極の形だといえるのである。

そして，三作品の中では，illusion を結ばせる「安定した物」として，家具とか家とかいう *things* のほかに，「過去」の存在があげられている。既にⅢで，人に基盤を与える過去の意義については触れたが，この「過去」とは，「思い出」，「習慣」から，「歴史」，「伝統」，「遺跡」なども含む。これらと繋がることは，人を根づかせ，破壊を防ぎ，感情を膨らまさせる。

この，過去の力を象徴し，平和と安定の中に，過去・伝統・自然と一体化した，偉大なる illusion を与えているのが，*HD* のマウント・モリスである。

> She was at the foot of the most advancing promontory of the Mount Morris woods, at the point where, borne forward on inside rock, they most nearly approached the river. A rapture of strength could be felt in the rising tree trunks rooted gripping the slope, and in the stretch of the boughs; and there travelled through the layered, lit, shaded, thinning and crossing foliage, and was deflected downward on to the laurels, a breathless glory. In the hush the dead could be imagined returning from all the wars; and, turning the eyes from arch to arch of boughs, from ray to ray of light, one knew some expectant sense to be tuned in

to an unfinished symphony of love.[16)]

そして，このマウント・モリスは，ステラの息子ロデリックの中に根づき，彼を位置づける。「マウント・モリスがロデリックに与えたものは，ロバートがステラに与えたものと同じ，habitat である」[17)]が，このhabitat はロバートと違い，安定していて，ロデリックに確かな illusion を結ばせていく。

> It could be that Nature had withdrawn, leaving everything to be nothing but the identity of Mount Morris. The place had concentrated upon Roderick its being: this was the hour of the never-before – gone were virgin dreams with anything they had had of himself in them, anything they had had of the picturesque, sweet, easy, strident. He was left possessed, oppressed and in awe.[18)]

ボウエンは，*HD* において，人の中に創った illusion を全て破壊させるが，一つの救いとして，過去の上に立つロデリックに新生を暗示しているといえる。

Ⅵ

過去，物，伝統，習慣，代々の家，自然――これらは，人の imagination の源泉となり，感情を枯渇から救うと同時に，安定した illusion を結ばせる基盤を与えてくれる。ボウエンは，現代という不毛の時代においては，結局の所，illusion は保ち得ないとした。しかし，illusion を失った心は容易にひびわれる。人が感情を持って生き残るには，imaginative mind を持ち続け，art たる illusion を心の中に創り上げねばならない。ボウエン自身も，創作活動において illusion を art として生み出すことで，自らの感性の存在を確認し，ボウエンズ・コートの過去の力によって，その基盤をより強いものとしていった。ボウエン自身の分身ともいえる，カレン，アンナ，ステラの心は死滅したが，彼女自身は立派に生き残ったのである。彼女の，物，過去，伝統への執着は，単なる懐古主義ではなく，もろい illusion をどのようにして保つか，枯渇しやすい感情をどのようにして回復させるか，という生き残るための絶えまぬ行軍の結果だといえよう。

稿を終えるにあたり，ご指導くださいました，岡山大学文学部英語英米文学科主任・冨士川和男教授に深謝の意を表します。

注

1) 名木田恵理子： *the House in Paris* と *The Death of the Heart* におけるボウエンの子供のイメージ：川崎医学会誌，一般教養篇　9（1988）による。
2) Elizabeth Bowen, *The House in Paris* (1935; rpt. New York: Avon, 1979), p. 151.
3) Elizabeth Bowen, *The Heat of the Day* (New York: Knopf, 1949), p. 99.
4) *ibid.*, p. 105.
5) *ibid.*, p. 269.
6) *ibid.*, pp. 305–6.
7) Bowen, *The House in Paris*, p. 241.
8) Elizabeth Bowen, *The Death of the Heart* (1938; rpt. New York: Avon, 1979), p. 269.
9) Bowen, *The Heat of the Day*, p. 195.
10) *ibid.*, p. 217.
11) Bowen, *The Death of the Heart*, P. 72.
12) *ibid.*, P. 291.
13) *ibid.*, P. 83.
14) *ibid.*, P. 201.
15) *ibid.*, P. 133.
16) Bowen, *The Heat of the Day*, P. 197.
17) *ibid.*, P. 97.
18) *ibid.*, P. 352.